

Y16a 明治初期の教科書における天文学の記述

玉澤春史（京都市立芸術大学／京都大学）

現代の教育現場において、どのタイミングで、どの教科で天文に関する内容を扱うかは学習指導要領改訂のタイミングに限らず常に議論されている。この問題は日本だけでなく、IAU（国際天文学連合）のOAEでも各国のチームが教科書の記述について情報収集をしており（富田他，天文学会2020年春季年会Y07a）、一部国でも天文分野のカリキュラム変遷が見て取れる（玉澤，天文学会2020年春季年会Y02a）科目変遷は近代教育制度の発足段階でも見受けられ、明治期の教科書では天体力学や日月食に関する内容は『物理階梯』などの物理の教科書に、また地理の枠内では『芸子地文学』は導入部分の地球の形状から太陽，月，惑星などに触れられている。「遊星」など定訳が議論中のもの、「光学」など現在の用いられ方とは必ずしも一致しないように見えるもの、またオーロラの訳語として「極光」と同時に「北光」が使われていたりするなど、日本における科学知識の受容と理解変遷が単語の変遷にも見て取れ、一部は近世以前からの理解変遷が含まれる。知識・理解の増強により記載すべきと考える内容が増え、その結果それまでの記述分配ではやりにくくなるというのは明治からも見受けられ、常に見直しが必要とされる。